報告タイトル

日本の開発学にみる脱中心化の可能性と課題
——学術依存論の批判的考察——
Possibilities and Challenges of Decentralizing in Japan's Development Studies: A Critical Examination of Academic Dependency Theory

氏名（所属）

汪　牧耘（東京大学）
WANG Muyun (University of Tokyo)

要旨（800 字程度）

開発学は第二次世界大戦後、いわゆる「低開発地域」の経済成長を主眼としながら生まれたが、今や社会、文化や環境等の多様な議題やアクターを包含する学際的分野へと展開してきた。近年、非欧米社会による知識生産の脱中心化の機運が高まり、日本も開発学の再構築の一翼を担っている。しかし、日本の開発学をめぐる知識生産の国内の実態に関する議論は未だ十分とは言い難い。

本報告は、欧米への学術的依存が指摘される一方で、開発協力史の再検討や開発学の再構築が試みられている日本の開発学に焦点を当てる。具体的には、日本の国際開発関連の学術誌に重点を当て、それぞれの時代において、代表的な学術誌がどのように創刊され、どのような特徴があるかを分析する。この分析を手掛かりに、日本における脱中心の現状と課題を明らかにする。

分析の結果、日本の学術誌の性格は時とともに変化してきた。日本の開発学はその起源から英語圏の知識体系と密接に関わってきたが、この関係性は単なる「依存」ではなく、抵抗や触発にもなりうることが示唆された。しかし、脱中心化の課題を欧米との関係性のみに帰結させることは、日本国内の教育・研究体制の構造的問題を看過することにつながる恐れがある。日本においても、1990年代以前は中心的人物や特定分野の研究者たちによるネットワークが形成されていたが、現在の開発学界では特定の機関や人物に「中心」と呼びうるほどの権威や知的基盤が集中しているわけではない。むしろ、関連学術誌は論客減少のなかで質管理のジレンマを抱えている。こうしたジレンマもあるものの、日本の開発学における政府との距離感や収束力の弱さは、特定の人物や分野による知識生産の独占を防ぐ強みでもある。

本報告の分析を深めるためには学術刊行物の継続的な調査が不可欠であるが、ここで得られた知見が他のアジアの開発学作りの後発国が直面する脱中心化の議論に寄与し、さらにはグローバルな学術コミュニティにおける新たな協働の可能性を探る端緒となることを望む。